

「国を愛する心」

アメリカに住んでいる娘の所に行った時のことです。ある日、車で近くのデパートに買い物に出掛けました。その道すがら両側の家々のところどころに星条旗が風に揺れて立っているのが見えるのです。「あら今日は何の日なの？」と娘に聞きました。「あら、あれは、こちらでは自分の国の国旗を大切にしているのよ」と言うのです。何の祝いの日でもないのに国旗を掲げているのです。日本ではこのような風景は見られません。お祝いの日でさえ国旗を掲げる習慣がなくなってしまったのです。私が幼少の頃、何々の祝いの日と言っては、父が折り目のついた日の丸の旗を出して丁寧に広げ、所々に黒く塗った竹竿に結びつけ、突端には金の玉をさして、玄関口に立てたものです。その旗がとても大きく風に揺れているのを見るのが大好きでした。子供は成長期にその親の動作を見て、これが日本の旗であるということが自然に分かってくると同時に、大事にしないでという気持ちが芽生えてくるのではないのでしょうか。

今になって国を愛する心が育つ教育が重要であると、教育基本法の見直しに着手する始末です。「愛国心」ではいかん。国を愛する心と表現を変更せよ。「いや文言によっては危ういものになる」とか、又は単に公に表現すると、個人を無視したと感ずるなど、たいへん慎重に論じられている。では、国を愛する心を育てることとはどうゆうことなのでしょう。両親が日本人で日本で生まれ、日本風土、習慣の中で日々の生活から、自然に育んでいくものではないのでしょうか。しかし戦後教育の中で日本の国旗を否定してしまい、自信をもって掲げることができなかった私達大人の責任だと思うのです。何の日でもないのに国旗を掲げるとは一体どんな気持ちなのかしら、娘に少し、しつこく聞きました。娘いわく、「アメリカは多民族の集まりで形成されている国家でしょう。自己の中に私はアメリカ国民であるという誇りを自己主張したく、その表れではないかしら」といとも軽く言い離された。私も自分の国を愛し誇りに思っているのです。でもなかなかそのような行動が出来ないのです。

今年の2月の新聞紙上に掲載された記事には、「全国青少年アンケート」調査によると、日本の将来は「暗い」と思うが75%「明るい」と思うが24%で「日の丸」「君が代」については43%が関心がないのです。この数字が示



す実態を真剣に受け止めなければなりません。

また、考えさせられる場面に出会いました。7月4日のアメリカ独立記念日のことです。ワシントンDCの国会議事堂を中心に広場全体を会場として大イベントが催されました。私も滅多に経験できないので娘一家とDCに出掛けました。生憎雲空で今にも雨が降りそうな日です。めいめいに会場内に場所をとり、開催時間を待ちました。私の隣りの広い芝生では5・6人の若者がボール蹴りをしていました。今風の格好をして大きなスニーカーを履いて、一見不良っぽく見えました。でも喜々としてボールを蹴っていたのです。開催時間が近くに近づくと人々が大勢集まってきました。すっかり広場は人々で埋めつくされたのです。

さていよいよ開幕です。その時メイン舞台から流れてきたのはアメリカ国歌の曲です。耳にした途端人々は一斉に起立し、胸に手をあて、国旗がはためいている国会議事堂の建物に注目して、国歌を聴きだしたのです。何と会場全体が静かになり一体感に包まれ、曲のみです。すばらしい！さっきのあの青年達も、小さな子供達も同じ動作で建物を仰いでいるのです。なんと私の思い違い。国旗、国歌を通して国を想う。愛する感情が育っている。そして大切に思う姿に心打たれ、驚きと感動を受けました。私も慌てて、胸に手をあて、国歌が鳴りやむまで静かに聞き入りました。とても満たされ、気持ちが落ち着きました。あの青年達は小さい時から、学校で家庭でと、事ある毎に教えられていたのです。この国の「国を愛する」真の姿を見たのです。その国の国民性を培う土台は教育です。日本は戦後教育の現場で、今までの教育はすべてnoと言うところから始まったのです。日本古来から培った文化、伝統、習慣、しつけ等、人間形成の基になるものすべて否定してしまった表れです。これはその当時の大人達。特に指導的立場にあった政治家や教育者の責任と言わざるをえないのです。今の青年達の意識はバブル崩壊後の大人社会を反映して、全体に悲観的で、内向き志向が目立っている。政治家は信頼できないとの回答が90%に達している。この結果から見えるのは、日本の進むべき確固たる大きなビジョンの欠如と、明確に示した指針のなさが如実に表れているのではないのでしょうか。次の世代を担う青少年の為に再び同じ過ちをしてはならないと切に願うばかりです。

(浜田会員記)